

教師発達と学級経営

企画者 蘭 千壽・伊藤美奈子
 司会者 蘭 千壽（防衛大学校）
 話題提供者 伊藤亜矢子（お茶の水女子大学）・高橋知己（岩手県・小屋瀬小学校）
 内藤哲雄（信州大学）
 指定討論者 伊藤美奈子（お茶の水女子大学）・淵上克義（岡山大学）

＜企画主旨＞

最近の文部省調査によると、学級崩壊の主な原因の1つに、「教師の指導力不足」があると指摘されている。教師がうまく学級経営をおこなうためには、学級経営についての基本的な考え方や実際の学級把握・診断・指導についての力、児童・生徒理解力などが問われることになる。このような力の向上が教師の発達を促すことになる。

本自主シンポでは、上手な学級経営をおこなうことを目的としていかに学級を把握し診断し、どう指導するのかについていくつかの理論に依拠しながら提言する。話題提供者はそれぞれのフィールドで優れた学級集団指導の実践研究をおこなっておられたり、スクール・カウンセラー業務に携わっておられる方々である。伊藤氏は質問紙法と面接法を併用した学級把握・診断・指導について報告する。高橋氏は〈開かれた〉学級・〈閉じられた〉学級体験分析に基づく学級把握・診断・指導について報告をする。内藤氏はバック分析法を用いた学級把握・診断・指導について報告する。指定討論者の方々には、伊藤氏は学校臨床の立場から、淵上氏は学校、学級経営の立場から、学級集団指導と教師発達のあり方の問題点の指摘をお願いしたい。当日は、フロアの方々とともに議論し考えを深めていきたいと考えている。

＜質問紙による学級風土アセスメント＞

伊藤亜矢子

学級は学習と同時に生徒の成長・発達に影響を及ぼす生活の場である。筆者は学級を生活の場と捉え、生徒の適応や精神的健康と関連する学級の心理社会的側面に焦点をあてた学級風土アセスメントを試みてきた。また学校臨床活動の経験から、学級の個別的な問題解決には、教師や生徒らの実感に即した具体的な学級風土把握が必要と考え、次のような特徴をもつ質問紙（中学生対象）を作成した。第1に、学級内の生徒の総意として学級風土を捉えるため個人ではなく学級単位の分析とした。第2に、生徒の実感に即すよう、生徒面接で得た生徒による学級描写を項目に加えた。第3に、尺度毎の分析のみならず単項目での分析を重

視し学級の個別的な性質を詳細に把握することを目指した。質問紙は現在も改訂作業継続中であるが、観察・教師面接・生徒面接の結果と、先行研究および欧米での主流な学級風土アセスメント質問紙 CES や LEI 等を加味して作成した。

さらに、質問紙を用いた学級風土アセスメント結果とそこから導かれる今後の課題等を担任教師らにフィードバックしてきた結果、次のような学級風土アセスメントの利点が指摘された。即ち①生徒の感じている学級風土と担任教師のそれとの異同を確認できる。②学級に関わる教諭らが結果を共有することで、学級指導等についてアセスメント結果を媒体とした具体的な議論が可能になる。③アセスメント結果から導かれる今後の課題が学級指導の参考となる、④継続的に学級風土アセスメントを行うことで、教師の働きかけが学級にどう影響しているかを確認できる、等である。以下、アセスメント利用の具体例を一つあげる。

＜事例＞新旧担任の交替前にアセスメントを行った中学2年のA学級は、のびのびと楽しく学級生活に満足できる学級だが、真面目にきちんとという方向性にはやや乏しいという結果だった。旧担任は大枠を示す他には細かい事に許容的な教師だった。アセスメントでは教師-生徒関係も比較的良く自由度の高い学級経営に生徒も満足なようだった。一方新担任は、生徒の自主性を重んじつつ、けじめや秩序にも配慮する教師だった。生徒の現学級への満足感が高いだけに、けじめや秩序についての新旧担任の方針の違いが生徒の不満を強める危険が予測され、新担任は4月当初に生徒達から向けられる違和感を事前に予測できた。

このように学級風土アセスメントは、学級経営を巡る個別的な問題の予測や対応の一助となると考えられる。特に生徒側からの学級風土把握を具体的に知ることは、教師にとって自らの学級経営のフィードバックとして意味をもつと思われる。

＜開かれた〉学級-〈閉じられた〉学級

を視点とした学級経営の分析の試み

高橋知己

現代日本社会においては、人間のもつ価値観が